L'OCCITANE
EN PROVENCE

SUSTAINABILITY
NEWSLETTER

12
2026 / Vol.10





つながるアクションが、未来を変える。

8月から10月にかけて、私たちは地域の皆さま、子どもたち、そして自然と向き合いながら、さまざまなサステナビリティ活動を重ねてきました。岩手県釜石市・大槌町で復興の歩みに寄り添い、全国の盲学校へハンドクリームを届け、子どもたちの挑戦を応援する。そして、社員100名が鎌倉由比ガ浜に集い、一つひとつのごみを拾い上げました。海岸で見つけた小さなマイクロプラスチックは、参加者の手によってアートへと生まれ変わり、新しい価値と未来へのメッセージを宿しています。

地域に寄り添うこと。誰かの毎日にそっと力を添えること。海や森を守ること。そして、役目を終えたものに、もう一度新たな命を吹き込むこと。 一つひとつの行動は小さく見えるかもしれません。けれど、想いを重ね、仲間とつながることで、その小さな一歩は未来を動かす力になります。 人と自然、地域と未来が、ともに豊かであり続けるために。私たちはロクシタングループの一員としてこれからも、身近な場所から、心を込めたアクションを積み重ねていきます。







r来年のグランドオープンに向けて健やかに育つラベンダー

ラベンダーの香りとともに、地域の未来を育てる。釜石市・大槌町を訪ねて。

この夏、私たちは岩手県の釜石市と大槌町を訪れました。今回の訪問のテーマは、長くご縁を育んできた地域の「これまで」と「これから」。復興から地域の新しい魅力づくりへと歩みを進めるラベンダー観光農園、そして山林火災から森を守るために力を尽くした方々への感謝。二つの取り組みを通して、地域に寄り添い続けることの大切さを改めて感じる機会となりました。

ラベンダーから始まった、地域の新しい未来

釜石市では、2027年7月の正式オープンを予定しているラベンダー観光農園を視察しました。このプロジェクトは、ロクシタンを象徴する植物のひとつであるラベンダーを通じて、復興を遂げつつある地域に新たな魅力を生み出そうと、釜石市とロクシタンがともに進めてきた取り組みです。釜石市と、創設者オリビエ・ボーサンの故郷であり、ラベンダーで知られる南仏プロヴァンスのディーニュ・レ・バン市が友好姉妹都市であることも、この活動をつなぐ大切なご縁となっています。

2022年から３年にわたり実施したクラウドファンディングを通じて多くの皆さまから支援が寄せられました。その想いを受け継ぎながら、専門家のアドバイスのもとで土壌改良を進め、定植したラベンダーも着実に根付き、育苗も順調に進んでいます。園内にはラベンダー以外の植物の植栽やベンチの設置も進み、2027年7月の正式開園に向けて、少しずつ農園らしい風景が形になってきました。復興支援として始まった活動が、時間をかけて地域の新たな観光資源へと育っていく。いつの日か、この場所に一面のラベンダーが咲き、その香りを楽しむために多くの人が釜石市を訪れる。そんな未来を想像すると、サステナビリティとは「何かを支援して終わる」のではなく、その土地の人々とともに未来を育て続けることなのだと感じます。

森を守った皆さまへ、800の「エール」を

今回の訪問では、釜石市・大槌町、そして消防関係者の皆さまに向けた「サマーエール」寄贈式も実施しました。大槌町で発生した大規模な山林火災。その鎮火活動に長期間尽力された消防隊員をはじめ、地域を守るために力を尽くされた皆さまへの感謝と敬意、そして傷ついた森林の一日も早い再生への願いを込めて、800キットのエールギフトを贈呈しました。森林は一度大きな被害を受けると、元の姿へ戻るまでに長い年月を必要とします。だからこそ、火災が収まったところが「終わり」ではありません。その後も地域に目を向け、森の再生とそこに暮らす人々を継続的に応援していくことが大切です。今回のギフトが、地域を守り続けた皆さまにとって、ほんのひとときでも心と身体をいたわる時間につながれば。そして、森林の復興を願う私たちの気持ちを届ける小さな「エール」になればと願っています。



大規模森林火災における迅速な鎮火活動に敬意を称えて



エールギフトに込めた思いを語る様子

支援から、ともに未来をつくる関係へ

ラベンダーを育て、新しい地域の風景をつくること。災害から森を守った人々に感謝を伝え、その先の森林再生を願うこと。

一見すると異なる二つの活動ですが、根底にある想いは同じです。地域が持つ力を信じ、人と自然の両方に寄り添いながら、未来へつながる変化をともに育てていくこと。復興は、一度の支援で完結するものではありません。種を植え、根付くのを見守り、花が咲くまで寄り添うように、地域との関係も時間をかけて育てていくものです。来春、釜石市の地に広がるラベンダーの風景が、新しい人との出会いや交流を生み、地域の次の未来へとつながっていくことを楽しみにしています。

ラベンダーの一株から、森の一本の木まで。

地域と自然に寄り添いながら、未来に残る風景を一緒に育てていく。
それも、私たちが目指すサステナビリティのかたちです。



視覚障がいのあるお子様が安全に練習に参加できるように社員ボランティアがサポート

見えないからこそ、見えてくるもの

ブラインドサッカー®を通じて、子どもたちの「挑戦する力」を応援

この夏、NPO法人日本ブラインドサッカー協会が主催する「夏休み特別企画 ブラサカキッズトレーニングin東京」にボランティアとして２日間参加しました。当日は、視覚障害のある子どもたち合計11名が参加。ロクシタンからは本社スタッフ、ストアのメンバーが合計10名ボランティアとして参加し、子どもたち一人ひとりをマンツーマンでサポートしました。

ブラインドサッカーは、視覚に頼らず、ボールの音や声、周囲の気配を感じながらプレーするスポーツです。今回参加した中学生・高校生の中にはすでに高い技術を持つ子どもたちもおり、実技練習では年齢に合わせてチームを分け、それぞれのレベルでトレーニングに挑戦しました。

印象的だったのは、子どもたちのひたむきな姿です。暑さにも負けず、一つひとつのプレーに集中し、より上手になろうと何度もチャレンジする。そして、選手からのアドバイスにも真剣な表情で耳を傾ける。その姿から、ボランティアとして参加した私たちのほうが、たくさんのエネルギーと刺激をもらいました。

トレーニング終了後にはギフトをお渡しし、「普段から愛用しています」と声をかけてくださるご家族も。スポーツという時間をともにすることで、子どもたちだけでなく、ご家族や参加者の皆さんとも温かな交流が生まれました。



音の鳴るボールを使ったドリブル練習





練習後にはロクシタンからささやかなギフトの贈呈

支援することから、ともに体験することへ

私たちが大切にしたいのは、製品や寄付を届けるだけではなく、社員自身が現場に入り、同じ時間を過ごし、相手を知ることです。「見えない」ことは、可能性がないことではありません。声を掛け合うこと。音を聞き分けること。仲間を信頼すること。そして、自分の感覚を信じて一歩を踏み出すこと。ブラインドサッカー®で子どもたちが見せてくれた姿は、一人ひとりが自分らしい方法で力を発揮できる環境をつくることの大切さを、私たちに教えてくれました。

誰もが自分らしく挑戦できる社会へ

そのためにできることは、特別なことばかりではありません。まず知ること、出会うこと、同じ時間を過ごすこと。そして、相手の立場を想像してみること。その小さな一歩から、社会の中にあるさまざまな壁を越えるきっかけが生まれていくのではないでしょうか。子どもたちの「やってみたい」を、社会みんなで応援できる未来へ。これからも私たちは、人と人とのつながりを大切にしながら、一人ひとりの可能性が広がる活動を続けていきます。



製品の使い方をお伝えする社員スタッフ



ハンドクリームから始まり、学びへ。
広がり続ける視覚障害支援の輪。

私たちは毎日、目で見て、手で触れ、香りを感じながら世界と出会っています。しかし、世界を感じる方法は一つではありません。視覚に障害のある方にとって、「触れる」ことは、大切な情報との出会いでもあります。特に、点字を読む手指は、文字を読み、学び、人や社会とつながるための大切な存在です。そんな大切な手を乾燥や手荒れから守りたい。その想いから、ロクシタンは今年も全国の盲学校へのハンドクリーム寄贈を行いました。

9,022個のハンドクリームに、想いを込めて

9月、全国67校の賛同いただいた盲学校の幼児・児童・生徒、そして日々その学びを支える教職員の皆さまへ、合計9,022個のハンドクリームを寄贈しました。全国の盲学校への本格的な支援は、2022年、コロナ禍に全国67校へ約17,000本の手指アルコール消毒液を寄贈したことから始まり、現在まで継続しています。9月13日には、社員が筑波大学附属視覚特別支援学校を訪問。生徒の皆さんはもちろん、その成長に日々寄り添い、導いている教職員の皆さまへの感謝も込めて、直接ハンドクリームをお届けしました。ロクシタンと視覚障害支援とのつながりは、実は30年近く前にさかのぼります。1997年、ロクシタンは製品パッケージに点字表記を導入しました。「すべてのお客様に、ロクシタン製品が持つ感覚的な体験を楽しんでいただきたい」。そんな想いから始まった取り組みは、チャリティ製品や視覚支援プログラムへ、そして日本では盲学校や日本眼科医会、日本点字図書館などへの支援へと広がってきました。



「届ける」から、「ともに未来をつくる」へ

そして今年、その支援がもう一歩、未来へ進みました。

9月24日、ロクシタンジャポンは筑波大学と「視覚等障害者教育の支援に関する連携協定」を締結しました。

ブランド創設50周年、そしてロクシタンファウンデーション設立20周年という節目に、これまで積み重ねてきた視覚障害支援を、教育や研究という領域へさらに発展させるための新たな一歩です。

筑波大学は、附属視覚特別支援学校を有し、視覚障害をはじめとした障害教育・研究の分野で長年にわたり専門的な知見を蓄積してきました。今回の協定では、それぞれの強みを活かしながら、より多くの子どもたちや教育現場への支援を広げ、障害者教育の大切さを社会へ発信することで、地域社会と共生社会の推進を目指します。

さらに、その取り組みの一環として、視覚障害のある子どもたちの教育環境や学習機会の充実を応援するクラウドファンディングも実施。資金を集めることだけではなく、視覚障害や障害者教育について一人でも多くの方に知ってもらい、「知る」「共感する」「参加する」輪を社会に広げていくことも大切な目的です。

ハンドクリームから、その先の未来へ。

私たちがお届けしているのは、ブランドのアイコンでもあるハンドクリームです。

その一本が大切な手指を守り、点字を読むことを支え、香りで癒して笑顔がうまれ、学ぶ意欲を後押しする。そして学校との出会いが生まれ、社員が参加し、大学との連携へ発展し、やがて子どもたちの未来を支える教育や研究へとつながっていく。小さなアクションも、続けることで、大きな変化の入口になる。それは、私たちがサステナビリティ活動を通じて大切にしていることでもあります。

香りを感じる。
肌で心地よさを感じる。
手で触れて世界と出会う。

ロクシタンが大切にしてきた「五感」の体験だからこそ、できる支援があります。

誰もが自分らしく学び、挑戦し、未来に触れられる社会へ。

ハンドクリームを届けたその先にある、一人ひとりの未来を見つめながら。
私たちはこれからも、人と人とのつながりを大切に、支援の輪を広げていきます。





全社ボランティアイベント
鎌倉由比ガ浜ビーチクリーン

海を守る行動から、資源の循環を考える一日へ。

秋晴れで心地よい潮風がなびく10月９日。全社ボランティアとして、オフィス社員約100名が鎌倉の由比ガ浜海岸でビーチクリーンを実施しました。今回は、環境美化や啓発活動に取り組む認定NPO法人グリーンバードの協力のもと、海洋ごみ、とりわけプラスチック汚染について学び、実際に行動する機会となりました。

活動は、まず座学からスタート。グリーンバードの皆さまから、プラスチックごみが海や生態系に与える影響、そして細かく砕かれた「マイクロプラスチック」がもたらす課題について学びました。一度自然環境へ流出したプラスチックは、回収が難しく、長い時間をかけて小さな粒子へと変化します。私たちの日常的な選択が、遠くの海や未来の暮らしにもつながっていることを、改めて考える時間となりました。

その後、参加者は研修会場から由比ガ浜まで徒歩で移動。鎌倉の街並みや自然を感じながら歩く道のりも、地域とつながり、この場所を守る意義を実感するひととき。
ビーチに到着すると、チームごとに分かれて清掃活動を実施しました。ペットボトルや包装材、たばこの吸い殻など、目に見える大きなごみを回収するだけでなく、砂浜に混ざる小さなプラスチック片にも目を向けました。

NPO法人グリーンバード様による座学







100名が参加したビーチクリーンボランティア

マイクロプラスチックは、紙コップを使って丁寧に集め、研修会場へ持ち帰りました。小さな破片の一つひとつからも、私たちが見過ごしがちな環境課題の大きさが伝わってきます。活動の締めくくりには、回収したマイクロプラスチックを活用したアート制作ワークショップを実施しました。本来なら海に残り続ける可能性があったごみが、参加者の手によって作品へと生まれ変わる。清掃で終わらせず、資源が循環する可能性を体感できる時間となりました。今回の全社ボランティアイベントは、海をきれいにするだけでなく、プラスチックとの向き合い方、資源循環の大切さ、人間が環境に与える影響を自分ごととして考える機会になりました。小さな行動の積み重ねが、自然と共生する未来につながります。







視覚障がいの方でも楽しめる触れるアート

触れて、語らい、未来へつなぐ。

日本点字図書館に寄贈したアップサイクルアートと家具

ロクシタンジャポンは、社会福祉法人 日本点字図書館へ、使用済み容器を活用したアップサイクルアート作品と家具を寄贈しました。これは、長年にわたり取り組んできた視覚障害のある方々への支援と、資源循環を目指す活動をつなぐ取り組みです。

今回の寄贈は、2025年度に実施したクラウドファンディングで寄せられた支援をもとに実現しました。多くの方々の想いが、使い終えた容器に新たな価値を与え、日本点字図書館を利用する方々が集い、過ごす空間へとつながっています。

寄贈したのは、ロクシタンの使用済み空き容器をアップサイクルして制作されたアート作品3点と、店頭で回収した空き容器を再利用してつくられたテーブル、ベンチです。家具の制作には、資源循環の仕組みづくりに取り組むテラサイクル社の協力を得ています。役目を終えたはずの容器が、新たな素材として生まれ変わり、人と人をつなぐ場で活用される—この取り組みは、廃棄物を減らすだけでなく、ものの価値を見つめ直す機会にもなっています。

アート作品を手がけたのは、作家の石村大地先生です。作品は、視覚に頼らず、手で触れて楽しめることも大切にして制作されました。質感や立体感、素材の違いを感じながら鑑賞する体験は、アートをより多くの人に開かれたものにします。作品は、日本点字図書館が運営する「ふれる博物館」の企画展でも展示される予定です。

また、テーブルとベンチは館内のコミュニティースペースに設置されます*。利用者の皆さまや関係者の方々が休憩したり、会話を交わしたりする場所として、日々の交流を支えていきます。家具としての実用性に加え、回収された容器からつくられた背景を知ることで、訪れる人が環境や資源について考えるきっかけになることも期待されます。

ロクシタンは、自然の恵みを大切にしながら、五感を通じた豊かな体験を提案してきました。だからこそ、使い終えた容器をただ捨てるのではなく、新たな価値へとつなげること、そして誰もが自分らしく文化やコミュニティに参加できる環境を広げることを大切にしています。

*コミュニティースペースの一般開放時期は調整中。



寄贈された家具に刻まれた点字を読む理事長



空き容器をアップサイクルして制作されたテーブル



今回の寄贈は、「アップサイクル」「インクルージョン」「地域とのつながり」がひとつになった取り組みです。回収された容器は、アートや家具へと形を変え、これから多くの方々との出会いや対話を育んでいきます。

私たち一人ひとりも、日常の中で使い終えたものをどのように扱うか、そして誰もが心地よく過ごせる場をどうつくれるかを考えることができます。小さな選択の積み重ねが、資源を大切にする社会と、多様な人々がともに暮らせる未来につながっていきます。





LEAF TOKYO

街をきれいにする行動から、海を守る未来へ

秋深まる10月下旬。ロクシタンでは、オフィス社員とストアスタッフ、総勢115名が参加するボランティア活動「LEAF TOKYO」を実施しました。フラッグシップストアのある渋谷と、東京・八重洲の2拠点で、ごみを拾いながら地域の環境に目を向ける一日となりました。

美化活動は、単に街をきれいにするためだけのものではありません。海に流れ出るごみのうち、およそ7割は街から流出したものといわれています。道端に落ちた小さなごみも、雨や風によって側溝や川へ運ばれ、やがて海洋ごみとなる可能性があります。海を守るために、まず私たちの身近な街で行動すること。その大切さを、参加者一人ひとりが体感しました。

渋谷では、たばこの吸い殻をはじめとするポイ捨てが街中で見受けられました。また、一見するときれいに見える場所にも、植栽の垣根の内側にごみが埋もれていたり、自動販売機の横に多くのごみが放置されていたりする状況がありました。普段なら通り過ぎてしまう場所にも目を配ることで、街の環境課題をより具体的に知る機会になりました。

八重洲でも、さまざまな場所に放置されたごみを回収しました。オフィスビルや商業施設が立ち並び、多くの人が行き交うエリアだからこそ、誰もが心地よく過ごせる環境を保つには、一人ひとりの意識と行動が欠かせません。参加者は声をかけ合いながら街を歩き、目についたごみを丁寧に拾い集めました。

ロクシタンは、自然の恵みを大切にし、人と自然がともに豊かに暮らせる未来を目指しています。今回のLEAF TOKYOは、その想いを地域での行動へとつなげる取り組みです。社員が街で美化活動を行う姿が、地域の皆さまにとっても、ポイ捨てを減らし、ごみを適切に捨てることを考える小さなきっかけになればと願っています。

一人の行動は小さく見えるかもしれません。しかし、仲間とともに続けることで、街の景色を変え、海の未来を守る力になります。これからもロクシタンは、地域とつながりながら、より美しく持続可能な社会づくりに取り組んでいきます。









気候変動が揺るがす、水のめぐり。

身近な暮らしと自然を支える「水循環」を考える

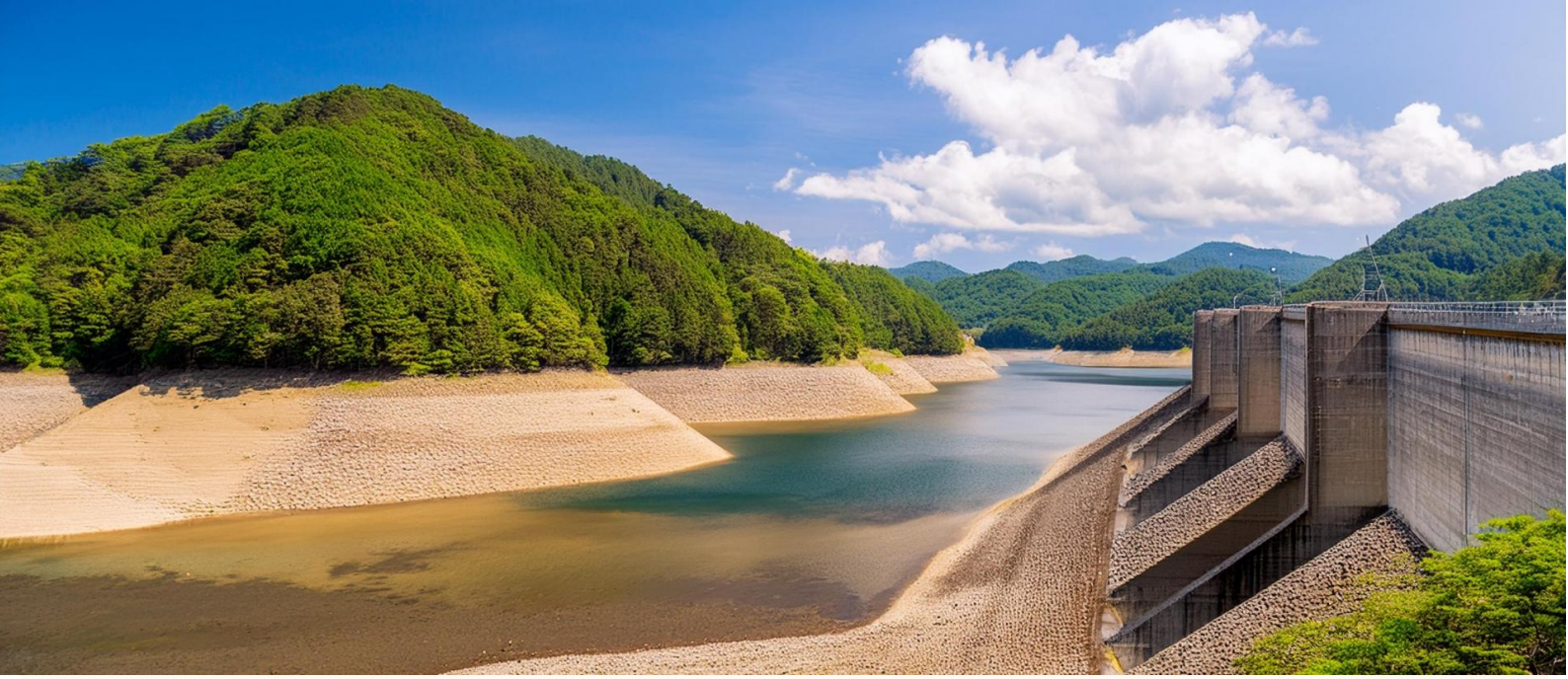
気候変動がもたらす影響の一つに、水循環の変動があります。

海や地表から蒸発した水が雲となり、雨や雪として地上に降り、川を通って再び海へ戻る。この大きな循環は、私たちの暮らし、農業、森林、そして多様な生きものを支えています。しかし近年、この当たり前だった水のめぐりが不安定になりつつあります。

気温の上昇により、大気中に含まれる水蒸気の量が増えると考えられています。その結果、雨が降る時には短時間に強く降りやすくなる一方、雨が降らない期間は長引き、地域によっては乾燥や水不足のリスクが高まります。特に都市部や湾岸部では、集中豪雨による浸水や交通網への影響など、暮らしに直結する被害が起こりやすくなります。

本来、山間部に降った雨や雪は、森林や土壌に蓄えられ、時間をかけて地下水や川へと流れ出します。水が山に戻ることで森はうるおい、生きものが育まれ、私たちが利用する淡水資源も支えられます。

しかし、雨が降る場所や量、時期が変化すると、この循環のバランスが崩れます。必要な場所に必要な時期の雨が降らず、別の場所で一度に大量の雨が降る—そんな偏りが、自然環境にも社会にも大きな負担をかけています。



日本でも、水源となるダム周辺で十分な雨が降らず、水位の低下によって、ダムの底に沈んでいた集落の跡が姿を現した事例があります。その一方で、記録的な集中豪雨による甚大な被害も各地で発生してきました。千葉や名古屋をはじめ、多くの地域で、河川の氾濫や浸水、土砂災害などが人々の生活に影響を及ぼしています。個別の豪雨を気候変動だけで説明することはできませんが、極端な降雨が起こりやすくなる傾向は、私たちが向き合うべき重要な課題です。

水は、限りある自然の恵みです。節水を意識すること、使い捨てを減らすこと、森林や海を守る活動に関心を持つことも、水循環を守るための一歩になります。日々の小さな選択が、自然の豊かさと、安心して暮らせる未来につながっていきます。

